

心理支援ツールを活用した子育て応援プログラム（２）

—取組例からみた比較検討—

Prototype of Childcare Support Program using Psychotherapeutic Activity Tools（２）： Comparative examination through case studies

中村 泰子

NAKAMURA Yasuko

大阪市中央子ども相談センター

Osaka City Central Child Guidance Center

Key words: 心理支援ツール, 子育て応援プログラム, 親子関係再構築支援

目 的

親子関係再構築支援は、児童虐待対応において親子関係を見直し具現化していく支援であり、法的に位置づけられて、より一層整備が求められている。支援には、時流に合わせた柔軟性や多様性、子どもや家族の主体性の尊重が必要とされる。発表者は再統合支援の在り方を模索する中で、保護者支援にデザイン思考を取り入れるとともに、心理支援ツールの開発・活用を進め、実践を重ねてきた(中村 2024)。心理支援ツールとは、心理支援や親子再統合支援で広く活用できる教材や素材などの非言語的アプローチで、視覚化や体験による感情認識やコミュニケーション促進の効果が認められている。効果的な保護者支援について検証するため、取組経過を整理し考察した。

方 法

実施時期：20XX 年～20XX+9 年

対象：社会調査や心理アセスメントを経て再統合担当による保護者支援の実施が適当とみなされた保護者

プログラム：取組を、①標準版、②移行版、③プロトタイプ版に整理した。標準版の内容は、既存のペアレント・トレーニングやペアレント・プログラムの要素を参考に構成。移行版は家族状況に合わせ内容をアレンジし、一部心理支援ツールを活用。プロトタイプ版は、主に心理支援ツールを活用した。各取組経過を整理し、比較検討した。

倫理的配慮：本研究で個人情報には取り扱っていない。発表については所属の承認を得た。

結 果

①標準版：記述式課題で、読字や書字の苦手さを示す場合があった。父母で宿題への取組進度がずれると、進度の調整が難しかった。「宿題」に苦笑、宿題を忘れる場合があった。ロールプレイを回避する場合があった。参加者の体調不良や精神状態の不安定さがある場合、内容を進めにくかった。回数や進め方が決まっており、進度の遅れや中断が支援者の不全感につながりやすかった。

②移行版：宿題やロールプレイを減らし保護者の心理的抵抗や負担を軽減。家族状況や保護者のコンディションに合わせた内容の精査や工夫には支援者側の経験値が必要。ロールプレイ以外で体験できる工夫に苦慮した。

③プロトタイプ版：心理支援ツールの活用で体験を通した気づきがある。目標設定や選択肢で主体性が尊重され、動機づけが維持される。ニーズに沿った回数調整が容易。

考 察

保護者支援の実施では、①標準版での宿題やロールプレイへの抵抗、②早急な問題解決や子どもの変化を強く期待している場合はニーズと内容の調整が難しい、③緊急

対応が優先されプログラムが進まない等の課題があった。アセスメントをもとに進め方を吟味し、個々の家族状況や関係性に沿うよう工夫を重ねながら移行版の実施を経て、心理支援ツールを活用するプロトタイプ版を整備した。

保護者の立場からは、「トレーニング」「課題」「宿題」等のワードは心理的抵抗を引き起こすことがあり、仕事や家事で時間的余裕のない保護者にとって、宿題は負担増となる。知的・精神面での配慮が必要なこともある。内容が保護者のニーズやコンディションに適合しなければ、支援者、保護者の双方にとって、不全感やダメージにつながりかねない。暴力加害親へのアプローチでは、こどもの行動変容を目的としたスキル習得よりも、こどもを尊重する考え方への修正が優先されるべきとの知見もある(スコットら 2009)。これらを踏まえ、指導・教育的印象にならないよう「子育て応援プログラム」と改称し、要素や内容を見直してきた。

一時保護中に親子交流支援と標準版を並行実施した取組例では、親子交流は順調に進み、保護者支援プログラムは欠席続きで中断となった。保護者の動機づけや優先順位は「こども」への関与に左右されると推察され、親子交流を優先し支援をスリム化したところ、保護者の動機づけ維持につながった。こどもの施設入所後、面会交流時に親子プログラムを計画して父にも参加を促すと、関与に消極的だった父も参加するようになり関係調整が進んだ。頃合を見て父母むけにプロトタイプ版を実施し、効率的な支援が実現した。支援の流れや内容は、家族状況に合わせて調整できる柔軟性があることが望ましいと考えられた。

動機づけの低い場合は特に、一方的に教えられるような内容では心理的な抵抗が高まり中断しやすい。既存プログラムを基にした標準版は、エビデンスの裏付けがあるものの、対象に合わせた柔軟性や多様性は取り入れ難く、自由度が低い。プロトタイプ版は、ニーズや状況に合わせた内容選択や回数調整が容易で自由度が高く、保護者の主体性が尊重されることが特長である(図)。ツールを活用した取組はアセスメントに有用な情報源となり、支援の流れがスムーズになる。プログラムのみで目標に到達しなくても、ツール体験から得られる気づきは、保護者が親子の関係性を見直す視点を広げて内発的な変化への動機づけを高める効果があり、支援者のスキル向上にも役立つ。



図. 保護者支援の比較